

令和7年度刊行の県史料紹介

黎明館調査史料室では、今年度末に刊行する『鹿児島県史料』の校正作業に取り組んでいます。これまで刊行してきた『鹿児島県史料』は、今回紹介する2冊を加えて112冊を数えます。また、ホームページには令和3(2021)年度刊行分までの『鹿児島県史料』104冊分のPDFも公開しています。あわせて御活用ください。

以下では、今年度刊行予定の『鹿児島県史料』(2冊)を御紹介します。

『旧記雑録拾遺 神社調五』

「神社調」(東京大学史料編纂所蔵)は、薩摩藩の領域であった薩摩・大隅・日向諸県郡の寺社の由緒・関係文書・歴代住職名などを郡郷ごとに編纂したものです。本年度刊行の『神社調五』には、以下の地域に関する内容を収めました。

- (1)「大隅国之物五」 国分之下
- (2)「大隅国之物六」 溝辺 日当山 踊 横川 始羅郡山田 清水 敷根
- (3)「大隅国之物七」 曾於郡
- (4)「大隅国之物八」 財部 末吉
- (5)「大隅国之物九」 恒吉 百引 栗野
- (6)「大隅国之物十」 湯之尾 曾木 馬越 本城 吉松 桜島
- (7)「大隅国之物十一」 桜島 福山 牛根 垂水 新城

以下、「大隅国之物五」の正八幡宮(現・鹿児島神宮(霧島市隼人町内))と「大隅国之物十一」の宮浦大明神(現・宮浦宮(霧島市福山町福山))の記事を紹介します。

正八幡宮については、正宮宝殿(本殿)・拝殿をはじめ、四所宮・石体宮などの摂末社の大きさや造り、内装などが細かく記されており、往時の姿が偲ばれます。また「正八幡宮奉納物」として列挙される甲冑や刀剣、経典・仏具類からは、同社が古来より篤く信仰されてきたことが窺えます。なお、令和4(2022)年、本殿及び拝殿、勅使殿、摂社四所神社本殿の各建物が国の重要文化財に指定されました。また、奉納物の「貴久公御寄進の御鎧二領」・「安芸守幸久(樺山善久)寄進鎧一領」・「斉興公御寄進之御拵刀(中略)秋廣」の4点は、いずれも国の重要文化財に指定され、黎明館に寄託されています。

宮浦大明神は、宝暦2(1752)年に、朝廷から正一位の位記と口宣案が下賜されました。これは「(正一位の神位が)勅許に相成り候神社は外にこれなく、この度初めての御事」と藩にとっても特別な出来事でした。そのため位記などを内覧することになり、これを城内に運び込む際、「往来は本御門相開き、虎之間の雁木より御上りこれあり候」との指示が出されています。本御門とは御楼門のことである可能性も考えられ、もしそうであれば、御楼門を開き位記などを城内に運び込んだことになります。御楼門は参勤交代や琉球使節の来訪といった特別な

場合にしか開けられない門であり、このときの極めて丁寧なあつかいが注目されます。

このほか、各地の寺社の由緒・宝物などに関するエピソードが数多く記されていますので、寺社巡りをする際のガイドブックとしてもご活用ください。

『市来四郎史料六／黒田清隆史料一』

昨年度に引き続き、東京大学史料編纂所蔵の「旧邦秘録」元治元年九・十(巻二七～巻三二)、「久光親話記 全」「親話記奉呈ニ就テ忠義忠清両公上申書 全」を『市来四郎史料六』として、当館所蔵の「黒田清隆関係資料」を『黒田清隆史料一』として、合冊して刊行します。

「旧邦秘録」は市来四郎が編集し、島津久光が加筆した編纂物で、文久二(1862)年が7巻3冊、同三年が24巻10冊、元治元(1864)年が32巻10冊、合計63巻23冊から成ります。他に「中稿旧邦秘録」が63巻23冊、「旧邦秘録材料」が188冊あります(すべて東京大学史料編纂所蔵)。

本書には、元治元年11月から12月までの間の記事が掲載されています。禁門の変後の第一次幕長戦争へ向けた緊迫したやり取りを多くの史料から読み取ることができます。

以下、目次の一部によりながら本書の概要を御紹介します。括弧内の算用数字は文書番号を表します。

「元治元年 九」(巻二七～二九) 軍艦御注文一条其他当時事実云々柴山良助ヨリ大久保一蔵へ送りシ書牘(8)・長藩諸組隊及ヒ諸国入込浪士人数ノ次第(27)・長州謝罪ノ儀云々西郷隆盛ヨリ大久保一蔵へ報告(33)

「元治元年 十」(巻三〇～三二) 長防征討出軍ニ付伊地知正治ヨリ小松帯刀へ送りシ届書(38)・毛利父子蟄居并五卿転座三暴臣斬首ノ儀総督ヨリ各藩へ達(48)・池田筑後守等欧州ヨリ帰朝シ建白ス(60)

「黒田清隆関係資料」は、薩摩藩出身者として初めて内閣総理大臣になった黒田清隆が残した史料群です。この史料は第2次世界大戦後、黒田家から国立国会図書館に寄託され、その後黒田家に返還され黎明館が所蔵することとなりました。国会図書館から黎明館に至る過程で史料が分割され、現在、その一部を東京都日野市立新選組のふるさと歴史館が所蔵しています。

今回収録した史料には、明治3(1870)～31(1898)年頃までの黒田清隆の書翰・意見書・覚書等を中心に、その他、土方久元書翰(17の2)、安田定則意見書(31・33)、佐佐木高行・西郷従道・山田顕義意見書(32)、谷干城秘録意見書(41)などがあります。

明治が始まって間もない頃、当時の政治家たちが政治・経済・法律・外交など多岐にわたって国家の基礎を作っていくために様々な意見を出しあって、真剣に議論を戦わせていたことが史料から生き生きと伝わってきます。

県考古学の先駆者 寺師見國の研究ノート

学芸課主査 竹添 和寿

はじめに

鹿児島県の考古学の先駆者である寺師見國は、主に昭和初期に活躍した医師であり、考古学者である。

生前、寺師が採集・発掘した考古・歴史資料、考古学関係記録・書簡など約2万点に及ぶ資料は、逝去後、昭和61(1986)年に黎明館に寄託され、平成25(2013)年には郷土の歴史・文化の研究に役立てて欲しいと遺族より寄贈され、黎明館で収蔵・管理している。

黎明館では筆者が企画した企画展「古代南九州における仏教の広がり」を令和7年9月11日から11月30日まで開催していたが、第1章「仏教が広まる以前の墓—南九州の古墳—」で、寺師の「古墳のノート」を展示した。その中には、資料の詳細な実測図だけでなく調査の経緯を記した箇所や地図などが記されている。これらのノートがもとになって調査報告書などを記述したと思われるが、報告書などには記載されていないエピソードなどが記されていてとても興味深いので、今回その一つを紹介したい。

考古学の先駆者 寺師見國

「古墳のノート」について紹介する前に、もう少し寺師見國の経歴を整理しておきたい。明治22(1889)年に川辺郡知覧町(現、南九州市)に生まれ、九州帝国大学医学部を卒業後、大正6(1916)年に大口市(現、伊佐市)で寺師医院を開業した。旧制大口中学校(現、大口高校)の校医でもあり、昭和5(1930)年、同校に赴任した木村幹夫(早稲田大学で考古学を学ぶ)との出会いを契機に、本格的に考古学研究の道へと進んでいった。赴任当初、体調を崩した木村が学校医であった寺師の診察をうけたことをきっかけに、歴史や考古学の話をしていく中で親しくなったようである。さらに一緒に遺跡調査などを行うなかで、考古学について学んでいった。その後も丹念な遺跡の踏査や資料の採集を行い、拓本においても卓越した技術を発揮している。縄文土器研究においては編年的作業が高く評価されている。また、古墳・弥生式土器・火葬墓・経塚・国分寺・古鏡など幅広い分野に研究は及んだ。昭和34(1959)年、70歳で亡くなるまで大口盆地を中心に県下の遺跡調査を積極的に進め、県考古学の発展の基礎を築いた業績は大きい。

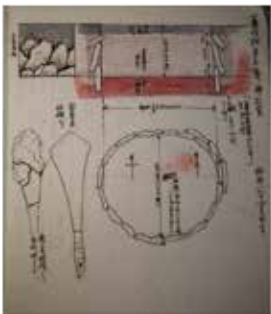


写真1 塞ノ神石室の実測図

寺師見國の「古墳のノート」

改めて「古墳のノート」について見てみよう。写真1から、寺師の卓越した描写力や実直な研究姿勢が見て取れる。

右の写真2は、春村古墳(伊佐市)の発掘エピソードが書かれている頁である。内容を以下に簡潔にまとめると、



写真2 春村古墳の発掘経緯を記した頁

- ① 営林署の苗圃が払い下げられてそこを開墾中に古墳が出たとのうわさを聞いて行ってみたが、すでに跡形もなかった。
- ② 農夫が古墳から出た直刀をしばらくそのままにしていたら、妻女の体の自由が利かなくなった。祟りを恐れて老松のしたにすぐ埋めて祓いをしたら、妻女の自由が利きだした。
- ③ 古墳らしきものが出たら連絡してくれ。こちらで祟りは引き受けるからと約束して何度も行ったがその後は出ず、お祓いをして埋めた直刀を大松の下より掘り出した。
- ④ 4月1日午後、木村幹夫教諭にもお願いして、中学生とともに古墳探しをやったがなかなかうまくいかない。
- ⑤ 翌日、二人の入夫を雇って掘り出したのが**第一号**と**第二号**である。

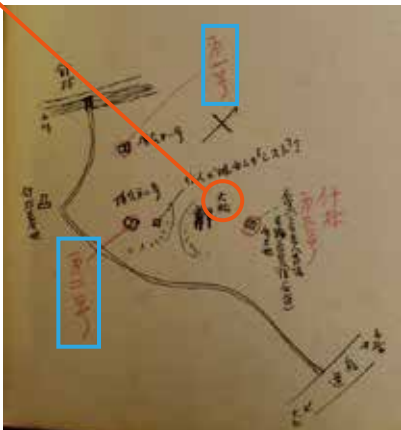


写真3 春村古墳の地図を記した頁

この春村古墳については、『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯に報告をしているが、上記のような祟りを恐れて耕作者が埋めて祓いをしたというエピソードはもちろん出てこないで、このノートにだけ記された興味深いエピソードである。

ちなみに、この古墳は「春村」という地名だが、音だけ聞いて記述したからか写真3のノートには「針村」と表記している。また近くから出た須恵器にも「針村」と注記がなされている。しかしのちに前述の報告書第五輯の註の中で「春村」と訂正している。

おわりに

黎明館には、今回紹介した「古墳のノート」以外にもこのような寺師の研究ノートがある。その中には、報告書に出てこない大事な記録が眠っている可能性があると思われる。今後、ノートの翻刻にも取り組み、紹介できればと考えている。

<参考文献>
・新東晃一「伊佐の考古学史(3) 寺師見國(一)」『南九州郷土研究』34(2022)
・鹿児島県教育委員会『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯(1958)